
LOOP ～或いは堂々巡り～

白山菊理

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

LOOP〜或いは堂々巡り〜

【Nコード】

N0387I

【作者名】

白山菊理

【あらすじ】

悪い予感はある中してしまふという呪われた運命の少女、礎亞裡沙。彼女と知り合った探偵、土師剣治。彼女と彼が見たものは、人々の様々な思考、考え方の違いであった。

零話 青い空と無表情

「ねえ、知ってる？悪い予感で適中するんだよ。」

イシズモリサ
礎亞裡沙、高校1年生。

彼女にはこれといって親しい友人が居なかった。高校に入学し、学校自体が始まったばかりだというのも理由の一つだろうが、それだけが理由ではない。彼女は中学時代も友人が居なかったのだ。苛められている訳ではない　が、誰も彼女に近寄ろうとはしない。そして彼女も人に歩み寄ろうとはしない。

けれども、彼女はこの状況を嘆いているわけではなかった。窓際の席で、澄み渡った青空を見上げてポツリと呟く。

「退屈。なんて出来の良いシナリオ。」

学校も終わり、彼女は一人帰路についた。

春風がスカートの裾を少しだけ揺らし、彼女は顔に纏わりつく髪の毛を煩そうに掻上げながら、ただ淡々と道を歩き続けた。目的の場所を目指して、前だけを見つめ、無表情のまま。

そして、着いた場所は学校から最寄の駅だった。

否、彼女は電車に乗るわけではない。

目指したのは駅の公衆トイレ。左程広くは無いそこで、彼女は一番

奥のトイレに入った。洋式、蓋が閉まっている。
その蓋を開けると其処には 赤ん坊の顔があつた。

＊

「ご苦労だつたな、亞裡沙。疲れたらう？少し休め。」

「疲れてません。でも時間に余裕があるなら休ませていただきます。」

「そうかい。」

部屋を後にする亞裡沙の後ろ姿を見送りながら、男は戯^{おどけ}たように頭^{かぶり}を振った。

「女の子ってのは、もっと笑った方が良いと思うけどなあ……」

電話 別れと出会い

土師^{はじ}剣治^{けんじ}、22歳独身。探偵事務所所長である。探偵事務所といつても、廃屋のようなビルの一室を間借りして事務所を開いているような状態であり、引越す予定もなし。故に、儲かっていないという事は容易に想像できるだろう。

「しかし、暇だねえ」

が彼の口癖である。仕事も無く、探偵であつても求人情報誌を広げるような始末、本当に働いているのかを疑いたくなる。生活費があるのかさえ疑わしいが、そのところは何とか大丈夫であつた。ただし、亞裡沙のおかげで。

俺って、ヒモか？ヒモなのか？

そんな事を考えながら、剣治は煙草の吸殻を口に咥えた。

亞裡沙と剣治は恋人でも親戚でも兄妹でも何でもない。赤の他人といった方が当てはまるであろう。

2人の出合いを話す前に、まずは剣治が探偵となつた経緯を知る必要がある。

剣治が探偵を志したのは、高校の卒業式が迫つたある日の事だつた。その日までは、探偵と言う職業は小説の中だけのものであり、

自分には関係ないものだと思っていたのだ。あの日までは……。

「剣ちゃん、大学受かったって本当？」

「ああ。」

「良かった。今度お祝いしなくちゃね。でもさ、剣ちゃんが受かったんじゃ私も頑張らないとな。同じ大学行こうなんて言い出した手前、受からなかったら格好悪いもの。」

「そうそう。人のことよりもまず自分のこと頑張れよ。お前が受かったら、一緒にお祝いしよう。」

「なーによ、自分は受かったからって。わざと落ちちゃおうかな。」

「

「頑張れよ、弥生。」

榆口^{にれぐちやまい}弥生、剣治の幼馴染でもあり、友人でもあり、義妹でもあり、彼女でもあった少女。明るく、優しく、活発で、誰からでも好かれていた彼女は、決して恨まれるような子ではなかった。

「弥生、今日は合格発表の日だろう？いつまで寝てるんだよ。」

彼女は剣治の家の近くに一人で暮らしていた。両親は事故で他界し、親戚も居なかったため施設に入れられそうなところを、剣治の両親が面倒を見ると言う条件で入所は免れたのだ。一緒に暮らそうと言う剣治の両親の申し出も断り、彼女は13年間一人で暮らしてきた

のだ。しかし、幼い頃は剣治の母がご飯の支度などをしに彼女の家へ行っていたため、一人暮らしというよりは、離れに住んでいると言ったほうが近いのかもしれない。

「ったく、たるんでるぞ。」

何度ノックしても、開く気配の無いドアを一瞥し、剣治は母親の所へ、この家の合鍵を取りに一度帰ることにした。何か様子がおかしいと、薄々感じながらも否定する自分の方が強く、けれども家のドアが内側から開くのを待つてはいられなかった。

「弥生、入るぞ。」

持ってきた合鍵を使い中へ。
ドアを開けた途端、噎せ返るような甘い匂いが鼻をついた。

「弥生！弥生！や……………」

そこに横たわる彼女にもう息は無く、ただ真っ赤に染まった唇だけが目に付いた。

彼女は、合格発表を見に行こうとしていた。私服に着替えている事からそれは一目瞭然だった。

白いセーターの腹部に赤い染みが広がっている。腹部には銀色のナイフが刺さったままだった。

「弥生いいいい！！！！」

その後、救急車と警察が来た。彼女の息はすでに無かったので、救急車や救急隊員が来ても何の役には立たなかった。

警察は現場検証を始める。

「しかし、ひどいつすねえ。どうせ痴話喧嘩からの発展じゃないっすか？」

大して捜査も進めていないのに、そんな無責任な言葉を口に出す警察。剣治は自分が疑われている事を知り、不快な気持ちになった。剣治も両親に対しても事情聴取が行われたが、完璧なアリバイがあり、容疑は晴れた。

しかし、他に容疑者は上がらず警察は完全に捜査を投げ出してしまった。

「許せない……あいつらなんか任せておけるものか。」

剣治は受かった大学を蹴り、探偵を育成するための学校へと入った。警察学校でも良かったのだが、捜査で適当な事を言ったあいつらと一緒にになりたくないという気持ちからこの道を選んだのだ。

弥生、必ず俺が犯人を見つけて、そして……

学校を卒業し、この探偵事務所を開いた。だが無名の探偵に客など来るはずも無くコンビニのアルバイトなどで生計を立てていた。暫くはそんな日々が続いた。

ある日、土砂降りの雨の中事務所の前に佇む一人の少女に出会った。その姿はあまりにも最愛の人に似ていたため、思わずその人の名前を呼びそうになった。

「弥
」

「貴方が探偵さん？」

けれども少女は、剣治の思い出の中の人とは違う、か細く消えてしまいそうな声でそう言った。少女には彼女のような明るさが何処にもなかった。ただ、この空気とは肌が合わないともいえるかのうに、浮世離れしているように見えた。

「あ、ああ。まあな。」

動揺を隠し切れず声の上擦る。少女は何もかも分かっているかのような瞳でこちらを見詰め、意外な言葉を紡いだ。

「最初の仕事、もうすぐ来るわ。」

「え？」

それだけ言うと少女は走り去ってしまった。

そして少女と入れ替わるように、30代くらいの女性がこちらへ息を切らせてやってきた。

「あの探偵事務所の方ですか？この子を、娘を探して欲しいんです！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0387i/>

LOOP～或いは堂々巡り～

2010年12月24日14時00分発行